

「ぐるんぱのようちえん」

西内ミナミ・堀内誠一

長年にわたり、世代を越えて愛され続けるロングセラー絵本は、どのように誕生したのか、その秘密を作者に尋ねるインタビュー。今回は、もうすぐ誕生から50年になる絵本「ぐるんぱのようちえん」の作者、西内ミナミさんにお話をうかがいました。

編集協力/原陽子 撮影/赤井賢一、黒澤義教、志田三穂子

ロングセラー 絵本シリーズ

名作絵本が
生まれた日

1965年



「ぐるんぱのようちえん」とは？

「ぐるんぱのようちえん」

西内ミナミ/作 堀内誠一/絵 福音館書店
本体 800円+税 1965年初版

とつても大きなぞうのぐるんぱは、一人ぼっちでさみしがりや。じゃんぐるを出て働きに出ますが、どこへ行っても大きな大きなものをつくって失敗ばかり。「もうけっこう」と言われて、しょんぼりと次の仕事先へ向かうこと続きですが、その特大サイズのびすけつやおさらが大いに役立つ出会いがありました。「こどものとも」1965年5月号として初版、翌年単行本化。約50年に渡り親子3世代で読まれ続け、累計220万部を超える人気作品。

「ぐるんぱ」は私の自画像

——この本が出た当時、西内さんは広告業界で現役で働いていたそうですね。

そう、博報堂に女性コピーライター公募第一期生として採用されて、出産前まで勤めていました。当時女の人は結婚したら仕事を辞めるのが普通、母親になつたらなお辞める時代。これからどうしようと思っていたら、自宅から近いアド・センターというところがコピーライターを募集していると知って。早速、それまで手がけた広告のゲラのスクラップ帳を抱えて訪ねたら、アートディレクターをされていた堀内誠一さんが、面接で、何気なくつぶやくような言い方で「明日から来て働け

Interview

西内ミナミ

人生は信じられるものと
ハッピーエンドを届けたい

ば……」って。この機を逃しちゃいけないと、すぐに博報堂に産休届を出して、本当に次の日から大きなおなかを抱えて行ったのよ。で、待ったなしでデパートのコピーを書いていたの。出産後、正式に転職したことになるんだけどね。アド・センターはその頃の会社としては珍しく週休2日制で、おまけに制作部の人はタレント契約といって自由なスタイルで働いていたので、私は午後だけ出社して、残った仕事は自宅に持ち帰ってこなすということ。そんなある日、デザインの仕事の他に「こどものとも」などの絵本を描いていた堀内さんから、「また絵本を頼まれているんだけどお話を書いてみていい」って声をかけられたの。それが、



Minami Nishiuchi

1938年京都府生まれ。東京女子大学卒業後、博報堂、アド・センターにコピーライターとして勤務。在学中より児童文学の創作に励む。主な作品に「しっこっこ」(わかやましずこ/絵 偕成社)『ゆうちゃんどめんどくさいサイ』(なかのひろたか/絵 福音館書店)『おもいついたら そのときに!!』(にしまさかやこ/絵 こぐま社)など。最新刊は「こぶたのぶーぶ」(真島節子/絵 福音館書店)。

*ゲラ……校正刷りのこと。



いちばんはじめにぐるんばがいったのは、
 びすけつとやのびーさんところ。
 ぐるんばはとくべつはりきって、おおきな
 おおきなびすけつとをつくりました。
 (とくだいびすけつと1こいちまんえん)
 でも、あんまりおおきくてたかいので
 だーれもかいません。
 びーさんは、「もうけっこう」
 といいました。
 ぐるんばは、しょんぼり。
 とくだいびすけつとをもらって、
 でていきました。



びすけつとや、くつや、びあのごうじょう、行く先々でなんでも特別に大きなものをつくってしまうぐるんば。



(左)アトリエには絵本の仲間たちがいっぱい。
 (右)クッション、P100の写真で手にしているバベットなど、ぐるんばグッズも多数。

ぐるんばは、
 これから先の未来が全然見えなかった、
 当時の私の自画像です

『ぐるんば』を書くことになったきっかけ。学生時代に児童文学は書いていて、絵本の文章ははじめてだったけれど、ちょっと破天荒な、今までにないお話を書きたいなと思って。最初はぞうという大きな動物の中でも特別大きいぞうの話を書いたんだけど、絵を描く堀内さんが「絵本の画面の中に入らないよ」って(笑)。そうよね、それくらい、私は絵本のことを知らなかった。『ぐるんば』が出てしばらくしてから、あ、これって当時の私の自画像だな、と思つたの。ずっと1つの会社で働くつもりで就職したけれど、子どもが生まれてからも働き続ける女性なんてまわりにはいない。ぞうたちがぐるんばを「はたらきだそう」と言うのが、私はアド・センターに「はたらきにです」だったわけ(笑)。先はわからないけれど、とりあえずはびすけつとやさんに行ったら、堀内さんがいた。今後もし失敗があるかも知れない、いざいざいことにも会おうかもしれない、それが書いてある筆の先から、自分の希望として出てきたんだと思うのね。ぐるんばは失敗しながらいろいろなものをつくっていき天職を得る、私も結果として、「もうけっこう」とは言われなかつたけれど(笑)、夢だった作家になれた。『ぐるんば』が長年子どもたちに読まれていて理由を考えると、あの頃の20代の自分の気持ちと3、4歳の子の自立したい気持ち、それがぴたっと合うのね。本当は何をやりたいのか探して、自分の使命を果たしたい。このストーリーの中には自分探しの旅がある、それが子ども読者にわかるのね。コピーライターだったから、文章の読みやすさとリズム感は気にしていて、

普通だったら「びすけつとやのびーさんのところ」となるのに「びーさんところ」と「の」がないの。今なら「びーさん」とカタカナになるんだらうけど、カタカナになると全然イメージが違って、絵と合わないのね。今でも原稿は必ず自分で声に出して読みます。
 —そのデビュー作の『ぐるんば』が50年続くロングセラーになるとは……。
 思いもしない。だんだん年月が過ぎ、ずっと売れているのは何でだろうと思つて、わかつたのが今話したようなことなの。折にふれて何度も見直すと、堀内さんの絵の秘密も発見し続けなすすよね。『ぐるんば』をスタートに長年やってきて思うのは、絵本って作者と画家のコラボがうまくいくと、1+1が3以上になること。堀内さんははじめにお話ありき、画家はそこにどういった絵をつけて盛り上げていくかを考えなければならぬ、と言つていて、いくつもの画法の引き出しを持っていてお話を合わせて絵のスタイルを変えている、でもそれぞれ完成度が素晴らしい。私は堀内さんとの出会いに本当に感謝しています。



アド・センター時代に、堀内誠一・デザイン、西内ミナミ・コピーライトで作成していた広告。1964年の東京オリンピックを目前に、日本中がわきまっていた。



「ぐるんば」を書いた当時のライティングテーブルには、子ども時代の愛読書、友人の手づくり品や、読者からの手紙などが集う。



仕事場にはタイ(右上)、
韓国(左下)、台湾(右下)、
各国語版の「ぐるんば」も。

堀内誠一 Seiichi Horiuchi

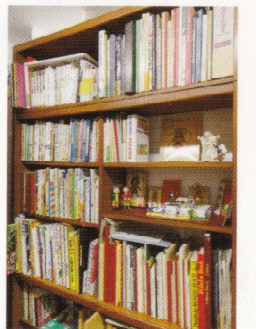
1932年東京都生まれ。グラフィックデザイナー、絵本作家。1947年、14歳で伊勢丹百貨店に入社、1955年アド・センター設立。平凡出版(現マガジンハウス)の雑誌「anan」「POPEYE」「BRUTUS」「Olive」などのアートディレクションで一世を風靡する。絵本作品に「くろくまプランキー」(伊東三郎/再話)「たろうのおでかけ」(村山桂子/作ともに福音館書店)など多数。1987年没。



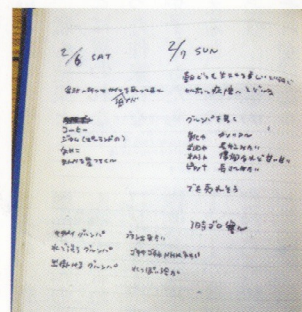
ハッピーエンドの大切さ

私は、5歳位までの子どもにはハッピーエンドの物語をたっぷり与えておいて、「人生は信じられる」ということをいったんは身につけさせてあげないと、人間は育たないと思うのね。そうでない、世の中には、信じられることもあるし信じられないこともある、という次の段階へは進めない。

人生、苦あれば楽ありなんて理屈を、子どもはすぐに理解できないでしょ？うちの息子が好きだった*「しょうぼうじどうしゃじぶた」では、じぶたは、いつかきつと自分が活躍できるときがくると信じていた結果として、最後に願いがかなう。これはストレートよね。ところが一方で別の絵本で見ると、天衣無縫な失敗だって、許されていいのよね。*「ひとまねござる」がそう。ホテルの部屋に勝手に入り込んで、壁に絵を描いちゃったりする、そういう



(上)西内さんの書庫の中でも、堀内誠一作品はまとめて1コーナーに。(左)1965年、「ぐるんば」制作時の堀内誠一の手帳。週末の土日に集中的に描いている。ちょうど次女の紅子さんが生まれた頃。



「母の友」2007年4月号(福音館書店)に掲載された続編のお話「ぐるんばのたんじょうび」(西内ミナミ/作 堀内紅子/絵)。

たずらって読者の子どもは普段大人に禁じられていることだから、絵本の中で、おさるがやってくれるので大喜び。人に迷惑かけるようなことだって許されてしまうわけだけ。

この絵本に、最初に大人の目で接したときには、あまりにはちゃめちゃなストーリーにあきれかえって、こんな本を子どもに読ませたいのかしら、と驚いたんだけど、子どもはとてもしがら。人生、冒険してみたいんだよ、って背中を押して応援してくれてるっていうのか。なるほど、これがあるって子どもは、明日も元気に前向きにやっついていけるのよねって、毎晩くりかえし読まされている内に、わかったの。お話の最後に主人公がハッピーになる絵本の必要性って、自分の子どもに、いっぱい絵本を読んであげていけるうちに、だんだんとわかってきたことで、それって今では、すてきな財産をもらったって思っています。

*「しょうぼうじどうしゃじぶた」(渡辺茂男/作 山本忠敬/絵 福音館書店)……大きな仲間をうらやむ小さな消防自動車じぶたが、ある日その小ささで活躍する物語。
*「ひとまねござる」(H.A.レイ/作 光吉夏弥/訳 岩波書店)……黄色い帽子のおじさんと暮らすおさるのじょーじが、好奇心からいろんな騒ぎを巻き起こす物語。



ぐるんばは、びあのを ひいて
うたいました。
—みーんな ほっぺが まっかだぞう
おてては どんこ まっくろだぞう
ほくは おおきな ぞうだぞう—
こどもたちは おおよろこび。
うたを さいて、あっちからも こっちからも
こどもが あつまってきます。
ぐるんばみたいに ひとりぼっちの
こどもも たくさん きました。
ぐるんばは、びすけつとを ちぎって、
こどもたちに あげました。

西内さんが堀内さんの絵に特に感動するという場面。

「ぐるんばのしょんぼりした気持ちが切り替わる、ここにとっても明るい色調をもって来ている。自分が役に立ってうれしい気持ちを、多分読者も無意識に見てとっていると思う」

ロングセラーの絵本は 大人がつくるものじゃない、 子どもの読者がつくっていくものですね



「『ぞうの中でも特別大きいぞう』を、堀内さんがここで描いてくれた」と西内さんが語る表紙。「大きく見えるでしょう。デザインの方で、ぐるんばが無垢な目でこっちを見ている。子どもでも大人でもない、見ている読者の誰もが自分の年に受け取れるのよね」

—西内さんの場合は、お子さんがまだ赤ちゃんで、親子で絵本を楽しむ前の時期に『ぐるんば』を書かれた。それがご自身の子育てをも後押ししてくる内容になっていったわけですね。

何も知らないうちに書いた一作目に、後から自分の子育てで追いついた感じね。ぐるんばは、行く先々で何をつくっても失敗続きで、いつもしょんぼりしながら次の場所へ行くんだけど、子どもが12人もいて忙しくて困っているお母さんとの出会いが転換期になって。何でもやってみないと、どんな出会いがあるかわからないじゃない。こうなればいいな、めげずにやってみよう、いいよ、と思って私が書いたお話が、たまたま子どもの成長期の気持ちと重なったのは、本当に偶然としかいいようがないの。決して名作を書こうとも思わない、子どもの心を育てようとも思わない、自分の悩みを書いたら、それがちょうど合っていた。

私は『ぐるんば』でデビューして以来、子どものために物語を書くんだってことは決めているんです。今は大人向けの絵本もたくさんあるけれど、私の場合は、子どもの読者が面白いと言ってくれないとダメなの。

ロングセラーをつくるのは

『ぐるんば』が読者に愛されるのは、子ども時代に限ったことではないみたいです。この本が出てからちょうどこの5月で50年になるんだけど、この本に影響を受けて大人になった人、大人になっても影響を受けている人が、たくさん読み継いでくださっているようです。自分が子どものときに読んでも

らって以来、ずっとどこかに覚えていて、「あ、この本好きだった」って思い出して自分の子どもに読んであげると、また、お孫さんに読んであげる、という人も多いみたいです。大人に与えられたことがきっかけで、長い間読み継がれていく、そして他の人に薦めたくもなる。

他のロングセラーの絵本で言えば、『ねないこだれだ』は子どもを最後で「とんでいけ」と解放するでしょう。

「ねないといけませんよ、おしりペンペン」なんて怒らない。私は子ども文庫をやっていてわかったんですけど、『ノンタン』もそうね、全部お話が子どもの心を解放している、大人が出てきて「いけません」とは言っていないって、あるとき気づいたの。子どもは、自分と等身大のものに反応するから、それがロングセラーになるんだと思う。ロングセラーというのは大人が考えてつくるものでなく、子どもが読み継いできたものなんですよ。

お知らせ

全国のフェア参加書店で 「MOE×ミリオンぶっくフェア」 を開催中!

MOEの特集記事とフェア参加書店が連動し、ご紹介した絵本を書店の店頭で直接手にとってご覧いただけます。フェア参加書店リストは、MOE web (www.moe-web.jp) に掲載していますので、お近くの書店にぜひお立ち寄りください。店頭ではミリオンセラー絵本カタログ「ミリオンぶっく2014年版」(無料)も配布しています。

*「ねないこだれだ」(せなけいこ/作 福音館書店)……こんな遅くまで起きているのは誰? 夜中に遊ぶ子は「おぼけのせかいへとんでいけ」。45年来人気のミリオンセラー。
*「ノンタン」……総計2700万部の「ノンタンあそぼうよ」シリーズ(キヨ/サチコ/作 偕成社)をはじめ他にも作品多数。いたすらで自由奔放なノンタンが子どもの共感を呼ぶ。